

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

人間の生命は受精の時に始まる

『人間の生命は受精、受精の時に始まる。』これは、我々みんなが嫌というほど耳にしてきた言葉だ。私の祖父がそれを教わったのは彼が一八九〇年に医学校に入学したときである。私の父が同じ事を学んだのは一九二〇年入学したときだ。私もそれを一九四四年に医学校に入ったときに教わった。

しかし、私たちの長女が一九七六年に医学校に入学したときに、いつ生命が始まるのか本当のところは分からないと教わってきた。生命の起源については我々の先祖が知っていたことよりも、ずっと多くの事が分かっている時代だというのに、まことに変な話だ。それでは、私たちはいったい何を知っているんだらうか。

の一つとして、私たちの身体の中の細胞にも、二つの例を除いて、46のヒトの染色体があるということがある。精子の細胞は23である。卵子の細胞も23である。しかし、精子と卵子が結合したとき、 $23 + 23$ は46で、受精卵は適正な数の染色体を持つことになる。この精子と卵子の結合が、私たちが受胎とか妊娠と呼ぶものである。

受胎が完成したとき、新たな人間が存在するのである。大きさをみるならば、一つの細胞に過ぎないが、それでも生物学的には完全なるヒトの生命だと考えられる。この小さな一つの細胞である人間は二つの細胞に、次に四つに、八つに、十六に分裂し、青年期までには三千万個の細胞を持つことになる。しかし、数百万の細胞の一つ

一つが最初の基本の構成のままを保っている。つまり、最初の細胞が持っているのと全く同じ情報をもっているのである。

あなたが一つの細胞であった時点で、もう男性か女性であり、あなたは生きていて、人間であったのだ。46の染色体を持っているのだから、ウサギやニンジンであり得たはずがない。

あなたは今そのままであり、完成されていて内側から組み立てられていたのだ。死んでいく自分の細胞を取り替えながら、絶え間ない、そして自己抑制された、成熟と発達の過程を先へと進んでいったのだ。母の胎内に約9ヶ月いた後、おそらく90年間もの間生きることになる「空気」の世界へ誕生してきたのだ。

以上のような事から、あなたの人生は受精の時に始まり、あなたはかつて個の細胞だったというのは、明らかな生物学的事実

に基づいた叙述ということになる。一個の細胞だったとき、あなたはすでに今日あなた以外の何でもなかったのだ。ただ、もっと小さく、より成熟していなかっただけで、かつてのあなたの姿だった個の細胞にはその時から今まで、栄養と酸素の他には何も付け加えられていない。

完成され、生きているといえる、ヒトの生命は、やはり受精の時に始まるのである。この事実を否定する人というのは、あまり学識がないか、嘘をついているかである。

ジョン・C・ウイルケ
(医学博士)

日本：新しい世界的な中絶投資者

アメリカは一世代の間、世界の中で中絶と人口減少を促進するリーダー的立場にあった。しかし、メキシコ・シティー」政策がゆっくりと定着するにつれて、アメリカ政府は自身をその立場から脱皮させ始めた。しかし、アメリカが赤ん坊を殺すビジネスから抜け出す一方で、日本がそのビジネスに入りこんできた。

あの巨大中絶産業国におけるプロ・ライフ運動はどの様なものなのだろうか。日本は、胎児から法的保護を除去した最初の国の一つである。一九二〇年のソビエト連邦と一九三〇年代半ばの三つの北欧の国（アイスランド、スウェーデンとデンマーク）に続いて、日本は一九四八

年に中絶への道を開いた。日本の『優性保護法』14条は「健康」が危険な状態の時のみ中絶を認めている。そしてその「健康」は、アメリカの一九七三年の判決（ドー対ボルトン裁判で「要求あり次第中絶」を明らかにし、ロー対ウェイドの時は誕生まで中絶時期が延長した）と同様に、広く定義された。

政府が副作用に気がついていないために、ピルは日本で許可されていない。出産制御（バース・コントロール）の第一の方法として、コンドームがあるが、それは中絶の数を減らしてはいない。コンドームがあまりにも効果がないために、あらゆる所で中絶がおこっている。推定される中絶の割合は年間2百万人であり、これはアメリカ

の半分の人数である。中絶がほとんど未婚の人たちの間で行われる西洋の国々と違って、日本ではほとんどの中絶（70%）が、家族の規模を制限したい（あるいは生存している子供の数を制限したい）と思っている既婚の婦人の間で行われている。既婚の女性の8割もの人たちが、中絶を経験している。

寺が中絶された胎児たちのために追悼の儀式を行うことはよくある。しかし、彼らの死を悲しむことが、他の子供たちを保護する決意に移るわけではない。中絶を制限しようとする努力はあまりされていない。一九七六年に、中絶の年齢制限は懐妊期間28週間から24週間に減らされた。1億2千万人の国（日本）は、子孫を繁殖さ

せていない。平均的な家庭は、子供を1・8人もつている。

マザー・テレサは一九八一年に日本を訪れ生命の尊重と自然な家族計画（NFP）を奨励した。にもかかわらず、NFPは日本では根付かず、カトリック教会もそれを奨励するためにたいしたことはしていない。実の所、3カ所の病院（東京、横浜、名古屋）で行われていたNFPプログラムは、あまりにも関心が少なかつたために打ち切られた。教会は一九八四年にNFPを支持する声明を発表したが、具体的な計画や予算は含まれていなかった。

ローマ教皇が一九八一年に日本を訪れた少し前に、教会のスポークスマンはインタビューの中で、避妊に聞ける教会の教えは人々をローマから遠ざけるだけだとする意見にほとんどの聖職者は賛成し

ていると言っていた。幼児洗礼の統計は、カトリック教会が日本の他の教会と同様にゆっくりと衰えていることを示している。

日本が子供の虐殺をやめ、世界的な中絶に投資するということ新しい役割をやるめるといふ期待もある。（いつも期待は存在するのだ）この期待は教会組織によって促進されていくのだろうか。

アンソニー・ジママン

S・V・D 名古屋

抗議

預言者ダニエルは神を知っていました。彼は神の御心どおりに生きること、に身を捧げた、実に信仰深い人でした。いかなる代償を払おうとも正しいことを行い、誤りには立ち向かうことを決心していました。

ダニエルはしつかりとした人でした。他の人が恐れのため、尻込みをするような時、ダニエルは前に進みました。また他の人が現状維持を選択するようなときでも、ダニエルはそれが孤立につながろうとも抵抗しようとしていました。

ダニエルは活動的な人でもありません。他の人がある問題を心配している時、彼はそれについて何か行動しました。彼は神が彼に答えを示すまで祈り、断食をし、そして勇気を持ってそれに従いました。

歴史を通して、神の使徒は神の法に矛盾する文化的、社会的習俗に挑んできました。ダニエルのような人は正しいことを行い、誤りには堂々と立ち向かって行きました。神を知っていた人は、確固とした立場を貫き、それを行動に移しました。

デイトリツヒ・ホンホーフアーはこうした人の良

い例です。彼はルーテル教会の牧師かつ神学校の教授で、ナチ時代のドイツにおいて、ユダヤ人保護のために立ち上がることを教会に熱心に説いた人です。ホンホーフアーはこのため投獄されましたが、その間も、死後出版された「倫理」という本を通して教会に対して訴え続けました。彼の英雄的な人生の最後の仕事となったこの本は再び弱き者を代表して書かれました。今度は中絶された生まれなかつた子供達のためでした。ホンホー

フアーはまだ生まれしていない子供の人生を否定することは、生命を創造した神を否定することだと主張しました。

「母の体内にいる胎児を破棄することは、この生まれようとしている生命に神が与えた生きる権利を奪うことである。そしてこれば殺人以外の何者でもないのである。」

デイトリツヒ・

ボンホーフアー

(1906-1945)



カトリック司教

逮捕される。

アメリカ、南ダコタのシヨークス・フォールズのカトリック司教が、プロ・ライフ・ムーブメントに属している他の67人と共に逮捕された。4時間以上もの間、プロ・ライフの人々は州立の中絶センターの入口を閉鎖した。

組織者によれば、その日の朝は一人の赤ん坊も殺されることはなく、一人の女性は中絶の予約を取り消した。

胎児を救う救助団体に参加して逮捕されたカトリック司教は、ダドリー司教(62才)で3人目である。彼が参加を決意したのは「多くの祈りと正しい行動を起こすまでの内面の苦しい葛藤」の末という。

司教がリポーターに述べたところによると、プロ・ライフ・ムーブメント

の背景にある精神は、胎児の命が中絶によって奪われており、それは神の意志に反すると心から確信するところにある。」

また彼は司教管区は全ての妊婦に対して経済的援助をすることを付け加えた。

二人の愛と受胎

「ベリングズ・メソッド」
自然な家族計画」

自然な家族計画のためには、まず、受胎と性的な営みとが正しく評価されそして、受胎に至るプロセスを支配している自然の法則を理解することが必要です。この方法は生物学的なプロセスに逆らわないだけでなく、夫婦が一緒に自由な選択をすることが可能になり、夫と妻との尊厳を大切にすることで、こうして、夫婦相互の愛を強め、また、二人の愛と受胎への忠実な一致において生命を得、受け入れられた子供たちへの愛をも強めることとなります。

ジョン・J・ベリングズ

ビデオ28分 VHS / Beta

「ごらんください。私たちは今にも消されようとしている死に直面した胎児の声なき叫びを見る事ができます」

(B・N・ネイザンソン)

胎児からの SOS

人工妊娠中絶に対する賛否は今や世界中で最も激しい論争の一つとなっています。今回、超音波診断装置を用いて、中絶される胎児の胎内での反応を映像にとらえ、「沈黙の叫び」として公表されたことから、論争は更に加熱しています。

新しい生命を

守るために

胎児は人間です

《事務所だより》

立春を過ぎましたが、まだまだ寒い日が続きます。『冬ナクバ春ナキニ』この小さな事務所にも、躍動感あふれる春が訪れますように……。事務所を開設して一年が過ぎようとしています。手探りしながらの一年でした。協力して下さる方も少しずつ増えて、個人的にニユースをPRして下さったり、教会でおいで下さっている所もあります。又、若いお母さん方に話す機会があるからと、プロ・ライフのパンフレットを使って下さる方もありました。『みんなのプロ・ライフ運動』となるよう、今年は今身を充実させて行きたいと思っています。そのためにも共に働く仲間が与えられますようにと切望しています。先日、ある方から貴重なご意見をいただきました。大変嬉

しく思うと同時に、「仕方がない」で済ませてはいけなないと、数少ない名簿を繰りながら、力を貸して下さる方を探しています。ニユースの内容も、もっと読みやすく、そして日本の事情にマッチしたものを…と思っています。が、スツツも少なく、思いと現実のギャップはなかなか解消されません。私たちがだけでは限りがあります。皆様、どうぞ力を貸して下さい。『みんなのプロ・ライフ・ニユース』となるために、皆様のご意見・ご感想、記事等をお寄せ下さい。春を待ちつつ……。

2月14日

プロ・ライフ・

ムーブメント

スタッフ一同